

31

英語授業における4技能習得の手段としての 英字新聞活用法の研究

長江正利 (山陽女学園中等部・高等部)

1. はじめに ～研究の動機・目的～

かつて委託研究員として同様の研究に取り組んだが、その際の研究が十分満足のいくものではなかったこと、その後も英語授業における効果的な指導方法・教材等の模索が続いたこと、英字新聞という理想的な英語教材が頭から離れなかったことなどから、再度研究員として英字新聞の授業内活用を試みた。前回研究の反省に基づいて新しく採り入れた点は、以下の通りである。

- ・英字新聞には教科書には見られない記述面の特徴があるので、年度始めに英字新聞の読み方に関する指導を行う。ジャパントイムズ社発行の『週間 ST 活用法』を利用。
- ・英字新聞を音読する際に早読み（速音読）を導入。その準備として、英語Ⅱの授業内でも練習。
- ・簡潔な表現から内容を把握、推測する練習として、見出しから使用記事を選択させる。

当研究の動機ないし目的は、前回と同様、①単に志望大学に合格すること以上に英語を習得することの意義は大きく（卒業後の飛躍の鍵、社会貢献の手段）、②昨今の大学入試問題も、現場での教育のあり方も、『読み、書き』重視から『聞き、話す』を加えた4技能のバランスを重視するものになってきており、③自身の従来の授業展開を見直して、生徒にとって将来にわたり真に役立ち、かつ昨今の大学入試にも十分対応することができる指導方法を構築するためである。

2. 英字新聞を用いる理由

毎週学校に届く英字新聞（週間 ST）を生徒に配布する際の生徒の反応、表情を眺めるのを楽しみにしていた。「はい、教科書〇×ページを開いて！」と生徒に指示するときの生徒の反応とはまったく異質なものである。新聞を手には教室に入ると、配布前から生徒の目が輝く。「今週の第一面は何？」「今週はどんな記事が載ってるの？」「今週の特集は何？」等々。

もちろん、検定教科書はよく練られた教材であって、これを否定するつもりはなく、現に授業においてメインの教材として使用している。しかし、題材がホットで新鮮であることは、生徒の興味、関心を引き、学習意欲を起こさせるうえで重要な要素である。その点において英字新聞以上のものはないと確信している。将来的に蓄積していく知識としても意義あるものであり、英字新聞を読みこなせるということは生徒の将来にとって大きな強みとなることは間違いない。

同じ観点から、以前より検定教科書に加えて映画やラジオ・テレビ番組等を副教材として用いているが、英字新聞は、多角的な活用が可能である点、同じ内容を扱う日本語新聞との併用も可能である点など、様々な面でベストな教材のひとつである。

3. 使用教材と授業の進め方

教材はジャパントイムズ社の『週刊 ST』を用いた。理由は、①高校2年生程度の英語力でもなんとか読みこなせること、②読者のレベルを考慮しながらも、新聞らしく、かつ自然な現代英語による表現が用

いてあることである。授業は週5回の英語Ⅱのうちの1コマを、クラスは英語の模試偏差値40台～70台とかなりの幅がある生徒数20名未満の高2特進クラスを対象とした。

(1) 導入

前述のように、新聞という教材と教科書との違いに鑑み、新聞記事の読み方に関して簡単な導入的学習を行った。特に意識させた点は以下のとおりである。

- ・記事の見出しでその記事の全体像をつかむこと。見出し表現の特長にも注意させる。
- ・左から右へと意味の切れ目ごとに読み進めていくこと。(通常の読解演習と同じ)
- ・最初の段落に特に注意してその記事の要点をつかむこと。(通常の読解演習と同じ)
- ・記事によっては簡潔な表現が多いので、行間を読む気持ちで読んでいくこと。
- ・英文記事に特有の表現や語句を知ること。例) as of ～ (～現在で、～の時点で)

*使用した教材

- ・週刊 ST 活用法 クラス全員に1部ずつ配布。

(2) 前期

目標…英字新聞を読むという行為に慣れさせること。

クラス内の英語力の差が大きいことから、ディベート演習まで行う場合を除けば、読む記事を指定することなく、見出しから読んでみたい記事を探させるという方法をとった。海外を歩けば、看板やキャッチ・コピーなど、簡潔な文字表現が巷にあふれている。それらを見てすぐに伝達内容を読み取るという練習を兼ねさせることがひとつの重要な意図である。

*使用した教材

- ・週刊 ST (ジャパントイムズ社) 毎週クラス全員に1部ずつ配布。
- ・週刊 ST 用音声 CD 音声指導に利用。クラスで自由に聴けるようにする。
- ・The Japan Times Weekly (ジャパントイムズ社) ハイレベル生徒用に用意。

(3) 後期

目標…読んだ記事内容を伝えることができ、意見・感想を英語で表現できるようにする。

前期同様見出しから記事を選択して要約および意見・感想を書くという練習に加えて、指定した記事について同じ作業を行うという練習を実施。それをもとに、ディベートを生徒主体で行わせた。年間を通して、生徒の英作文を添削することはせず、間違いを気にしないで自由に書かせるようにした(前回研究の経験から)。

*使用した教材は(2)と同様である。

4. 4 技能の具体的な習得方法

(1) リーディング力養成 ⇒見出しからの記事選択・記事の要約

内容を要領よく相手に伝達するという能力の重要性、およびその前提としてポイントを押さえながら簡潔にまとめるという能力の重要性に鑑みて、読んだ記事の概要を把握、要約するという作業を重視した。また、事実、結果、原因・理由を明確にし、要約の中に簡潔に盛り込むよう心がけさせた。この作業には、慣れるまでに思いのほか多くの時間を要した。

音読(早読み)を取り入れたのはこの段階であるが、全体的に語彙力不足が障害となった。

(2) ライティング力養成 ⇒記事ないし要約に関する意見・感想の論述

要約した記事について自分の意見や感想を英語で書くという練習を行わせた。この作業は年間を通して多くの時間を要することとなった。50分の授業時間の中で書き終えることができない生徒も多く、宿題にせざるをえないことも多々あった。

文法・語法上のミスを恐れることなく、自由にのびのびと書くことを心がけさせ、教師による訂正

は、よほど目に余ることのないかぎり、あえて加えないこととした。また、単なる英作文で終わらないよう、その中に理由・根拠を盛り込むようにさせたことは、前述のリーディング力養成と同様である。

(3) リスニング力養成 ⇒ CD 利用およびディベート

ジャパンタイムズ社から出されている週刊 ST 用の音声 CD を利用した。拙い発音であるとはいえ、ディベート演習もリスニング力養成に一役買っていたと思われる。

(4) スピーキング力養成 ⇒ 指定記事に関するディベート

扱う記事を指定した場合は、その記事内容につき、全員参加の英語によるディベートを行わせた。最初は発言する生徒がほとんどいなかったが、慣れるにつれ、自分なりの意見を身振り・手振りも交えて何とか伝えようとする姿勢が表れ始め、他の技能同様、『慣れる』ということの語学学習における重要性を痛感した。

(5) 特にディベート演習について

ディベート演習においては、生徒の意見が賛否のいずれかに分かれやすく、特に初心者にとっては賛否に分かれるうえで考慮すべき事情が少なく、かつ理由を形成しやすいテーマであることが望ましいと考えるが、その点、添付の記事 (Atheists snap up U.S. park nativity scenes) などは恰好の題材であった。例えば、この記事からテーマを導くにあたっては、①年中行事化した宗教的風物を尊重すべきか否か、②キリスト教国においても信仰の自由は最大限尊重されるべきか否か、③クリスマスという特殊な時期においても無神論者の表現の自由は尊重されるべきか否か、④無神論者が増えてきていることは日本において支持政党のない人が増えていることと同じ現象と言えるか、⑤信仰の自由と表現の自由はいずれがより尊重されるべきか、またクリスマスという時期の特殊性を考慮した場合はどうかなどの、イエスかノーで自分の意見が明確にできるテーマをいくつか用意し、生徒代表に選択させることとした。

5. 各技能を統合する演習シートの作成

学習にあたっては、各技能の演習に活用できるよう添付のような演習シートを毎回用意した。演習シートを用いる授業の流れは次のとおりである。

記事を選ぶ → (聴く) → 選んだ記事の早読み → 要約 → 意見・感想の英語論述
→ (聴く) → 教師が選ぶ模範シートにつき内容・表現面の問題を検討、または指定
記事について同様の検討 → 指定記事につきテーマ選択 → 全員でディベート

以上は理想の進行形態であるが、時間や記事内容の関係ですべてを消化することは必ずしも容易ではなかった。しかし、回を追うごとにそれぞれに要する時間は少しずつ短縮され、英語による論述の量・質、および論述速度も向上していった。

6. 最後に (英字新聞活用の効果・反省など)

英字新聞という1つの教材を4技能習得のために徹底的に使いきる。これこそがこの研究の意図するところだが、方法的にも、時間的にも、まだまだ不十分であると自覚している。

救いとなったのが、冒頭でも述べた、新聞配布時の生徒の嬉しそうな顔であったが、いざ演習に入ると表情は一転、生徒によっては苦渋に満ちた表情に変わる。問題は、「読めない」「書けない」「言えない」であった。

苦渋の原因のひとつは、要約がうまくできないことだった。多くの生徒は全訳をしていたのである。当初の要約は、偏差値の高い生徒でも全訳に近いものだった。各段落の最重要文の訳をつなぎ合わせるというインスタント要約法を教えるとその苦渋はやや薄らいだ。

当研究は、和訳中心の授業から脱却していく授業改革と方向性を一にするものであり、全文訳をさせる

意図などまったくないのだが、読んだ『内容』の把握と表現という作業を、生徒たちはきわめて苦手としている。昨今の入試では、要約問題ないし要約類似問題を課す大学が多く見られるので、進学という観点からもこの能力を養っていききたいと思う。

英語論述はさらに生徒を苦しめた。しかし、細かいことにこだわらず、文法や語法の間違いを気にしないで書いてみるようアドバイスすると、何とか3～4行程度は書けるようになった。生徒によっては、かなり長文の論述もできるようになった。

ディベートは、女子高という事情もあって、慣れるまでは発言を引き出すことが困難だったが、クラスの留学経験者と相談をしながら次のような流れを確立し、徐々に討論らしくなっていった。

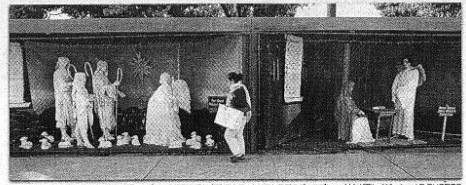
～ディベートの流れ～

- ① テーマに従い、一方的に賛成グループと反対グループのメンバーを決める。
- ② 時間を与えてグループ内で賛否の論拠をまとめさせる。
- ③ それぞれのグループの代表が論拠を説明し、その後、再度話し合いの時間を与える。
- ④ 質問、主張、反論などを相互に行う（ディベートの中心部分）。その後、判定とコメントへ。
- ⑤ 最後に、自分自身の到達した結論にしたがって自由に所属グループを選択させる。

英字新聞の活用による4技能習得の過程で特に感じるのは、生徒が、英語力のみならず人間的にも成長していくこと、特に前向きな姿勢が見られるようになることである。それは、新聞という教材の内容によるばかりか、それを用いる作業自体にもよるのではないかと考える。

Atheists snap up U.S. park nativity scenes

カリフォルニア州サンタモニカの公園では、毎年クリスマス近くなると地域の教会がキリスト降誕を描いたディスプレイを展示するが、今年は様子が違うのだという。



① Jesus, Mary, Joseph and the three wise men are being crowded out by atheists.
 ② Most of the Christmas nativity scenes that churches had placed in a Santa Monica, California, coastal park for decades have been displaced by non-religious displays.
 ③ The Santa Monica Nativity Scenes Committee, a coalition of 13 churches, and the Santa Monica Police Officers Association have traditionally claimed 14 of the 21 display spaces, which are vandal-proof, cage-like areas surrounded by chain-link fencing.
 ④ The coalition displays have featured life-size depictions of the story of the birth of Jesus Christ.
 ⑤ But atheists got all but three of the spaces this year because of a new lottery system. Only three of the display areas to promote their message are used.
 ⑥ One reads: "Religions are all alike — founded upon fables and mythologies. — Thomas Jefferson." Another reads: "Happy Solstice."
 ⑦ And a display with photographs depicting

King Neptune, Jesus Christ, Santa Claus and Satan reads: "Million Americans know MYTHS when they see them. What myths do you see? American Atheists. Since 1963, atheists.org."
 ⑧ The Santa Monica Daily Press reported that churches had little or no competition for the spaces during the past 57 years. This year, 13 people bid for spaces, prompting City Hall to use a random lottery system to allot the spots.
 ⑨ Two individuals got 18 spaces. One person can request a maximum of nine.
 ⑩ Secularists feel a need to be more vocal and express their civil rights, said Damon Vix, the man behind the effort to allocate the

space by lottery. Last year, he put up a sign with the Thomas Jefferson quote and selections on U.S. Supreme Court decisions about the importance of separating church and state.
 ⑪ "For 60 years, it's almost exclusively been the point of view of Christians putting up nativity scenes for a whole city block," said Vix. (AP)

■クリスマスに無神論者が主張する (転出) Atheists 無神論者, snap up ~ ~をさらう, nativity キリスト降誕, three wise men 東方三博士, are ... out 締め出されている。
 ① coastal 海岸沿いの, ② coalition 連合隊, vandal-proof 破壊行為から守る, fencing 柵, ③ depictions 描写, ④ lottery system くじ引き方式, ⑤ fables 寓話, mythologies 神話, Solstice 冬至, ⑥ MYTHS 神話, ⑦ bid for ~ ~を競る, allot ~を割り当てる, ⑧ Secularists 世俗主義者, vocal 主張する, allocate ~を割り当てる。【本文—300 words】

週刊ST演習シート

[] 月 [] 日 ()

記事見出し		掲載日	月	日
要約 (日本語または英語)				
自分の意見・感想 (英語)				
内容面の 気付き				
表現面の 気付き				
教師からの コメント				
討 議 用 メ モ				

[] 組 [] 番 名前 []